

川村三千雄先生：

「カントの宗教哲学」への沈潜と思索

学長 伊藤森右衛門

川村三千雄先生は、昭和19年10月に小樽経済専門学校教授として赴任されてから、小樽商科大学助教授、そして同教授として32年間にわたって教壇に立たれた。先生ご在任中は「哲学」および「倫理学」を担当され、学問研究の“戸口”に立つ若い学徒に貴重な道標を与えて下さったのである。

先生はいつも控目に終始され、ご自分の思索に沈潜されていたようである。先生のご業績をまとめられた『カントの宗教哲学』を刊行されるときも、固く辞退されておられ、「序文」にも遠慮がちなお言葉を述べられている。

昨年『カントの宗教哲学』を頂戴したとき一読させて頂いた。門外漢の私にとっては難解であったことはもちろんであるが、何よりもまず先生がひたむきにカント哲学に沈潜され、思索され、そしてご自分のものにしなければ止まずという学究の厳しさに感銘したのである。文字のひとつひとつに先生の思索の深さがにじみ出ている、読むというよりも考えさせられるのである。カント哲学のすべてを理解されてこそ、宗教哲学という深奥に到達されたことであろう。このようなご立派な業績を世に出に出すことに控目であられる先生には全く敬服せざるを得ないのである。とに角、『カントの宗教哲学』を刊行したことは、先生のご意向にそわないにしても、われわれにとっては世に誇れるものを残して頂いたことにお礼を申し上げねばならない。

先生は長い間眼が不自由でご令嬢に手を引かれて教壇に立たれる姿は痛々しいかぎりであったが、ひとたび教壇に立たれると、澄んだ大きな声で淡々と講義をされ、聞くものには眼の不自由さを忘れさせたのである。先生のご

(8)

講義は、お体が不自由であるにもかかわらず、退官までつづけられたことに
只々頭の下がる思いがする。

先生には益々ご自愛下さって、時にはわれわれをご指導していただき
たい。